

奈文研 ニュース

No.75 Dec. 2019

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2-9-1
<https://www.nabunken.go.jp>

国宝となったキトラ古墳壁画の活用

キトラ古墳は、奈良県明日香村にある、7世紀末から8世紀初頭(飛鳥時代)に築かれた円墳です。石室内の四方の壁には四神(青龍、朱雀、白虎、玄武)と十二支が、天井には天文図と日月像が描かれています。2019年7月23日、これらの壁画が全て国宝に指定されました。陰陽五行思想にもとづいた壁画の全体構成が判明する点や、高松塚古墳では見られない朱雀が良好な状態で残っている点が極めて貴重で、また、天文図は現存する世界最古の本格的な中国式星図として比類ない価値をもっています。

奈良文化財研究所は発掘調査から保存、公開活用まで、長らくキトラ古墳の事業に携わってきました。保存のために石室から取り外された壁画は、現在、キトラ古墳壁画保存管理施設にて保管しており、期間限定で公開しています。壁画は公開時に見ることができますが、石室内の様子を見ることはできません。そこで、国宝指定のポイントにも挙げられた「壁画の全体構想」を体感してもらうことを目的に、キトラ古墳の石室のペーパークラフトを、国宝指定の記念品として制作しました。組み上げると、手のひらサイズの小さな石室が完成します。この記念品は、9月21日から10月20日におこなわれた『キトラ古墳壁画の公開(第13回)』への参加者に、1万枚限定

で配布しました。

ペーパークラフトの制作にあたり、奈文研のキトラ古墳の発掘調査の成果を活用しました。石室の内部空間を再現するため、壁画の写真には、取り外し前の石室内の様子を正確に撮影したフォトマップのデータを使用し、天井の屋根形の削り込みの形状にもこだわりました。合欠きの表現や盗掘孔の形など、可能な限り実物に近い状態を再現しています。また、これにあわせて高松塚古墳の石室のペーパークラフトも制作し、仮設修理施設の公開で配布しました。

10月5日には、これらのペーパークラフトを用いたワークショップを開催しました。研究員によるキトラ古墳の解説の後、ペーパークラフトを組み立て、完成したミニチュア石室の盗掘孔からファイバースコープを入れて、壁画発見当時の感動を味わう体験をおこないました。参加者からは「このような大人も楽しめるイベントを定期的に開催してほしい。」「完成度が素晴らしい。」等のお声をいただきました。今回の経験を活かし、今後も文化財を活用した活動をおこなっていきたいと考えています。

第14回キトラ古墳壁画の公開は、2020年1月18日から2月16日、北壁の「玄武」を展示する予定です。国宝となった壁画をぜひご覧ください。

(飛鳥資料館 石橋 茂登・荻山 琴美/
埋蔵文化財センター 吉田 万智)



キトラ古墳壁画国宝指定記念 刊行物
(ペーパークラフトとチラシ)



ペーパークラフトを用いたワークショップの様子

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第200次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、藤原宮中枢部分の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的におこなっています。前回の奈文研ニュースNo.74でもお伝えしたように、今年度は大極殿東北部に調査区を設定し、東面北回廊の柱位置の確定、内庭部の整備状況、そして藤原宮造営過程の解明に取り組む目的で調査を進めていました。

従来、藤原宮大極殿院北方は礫敷広場だと考えられてきました。そのため、今回の調査区は、東端では東門の北延長位置で東面北回廊を確認し、西端では、藤原宮造営時に資材を運搬する目的で設けた運河と、そこに取り付く溝の検出を予想していました。

ところが、建物はないと思っていた大極殿北方から、回廊を新たに発見しました。この回廊は東面北回廊から大極殿側へのびることから、大極殿北方は回廊で囲まれていたことが判明したのです。

大極殿院の東を画する東面北回廊は、桁行14尺等間、梁行10尺等間で北へのびます。ところが2間のみ、桁行を10尺等間に変更していました。当初は柱位置の乱れだと考えていましたが、今回新たに発見した（仮称）大極殿後方東回廊の礎石据付痕跡が1基、1基と姿を現すにつれ、この柱間寸法の意味が判明しました。東面北回廊は、大極殿後方東回廊が取り付く2間分のみを、その梁行寸法にあわせて調整していたのです。このことから、両回廊は一連の造営計画のもとで柱位置を決定していることがわかりました。両回廊の礎石は抜き取られ、礎石を据え付けるための根石等が残るのみでした。



また、大極殿北方からは、東西にのびる掘立柱塀も検出しました。この柱列もまた、大極殿院を区画する施設であったと推測できます。

今回の調査では、回廊基壇裾にいくつも掘られた溝にも頭を悩まされました。これらは造営時の区画や排水を目的としたものですが、溝が思わぬところで曲がり、複雑に組み合う状況は、造営過程で溝を何度も付け替えていった様子が推測されます。調査区の西端では、運河に取り付く溝を新たに検出しました。基壇裾の溝と同じように、大極殿院の建設過程に伴い設けたものと考えられます。

今回の調査では、従来空閑地と考えられてきた大極殿院北半部の空間に、院を南北に画する回廊の存在があきらかとなりました。同様の施設は、前期難波宮の内裏を区切る東西棟建物にみられます。かねてより、前期難波宮と藤原宮はその規模や構造において類似性が指摘されてきましたが、今回の発見により、両者の強い関連性にくわえて前期難波宮からの連続性がより鮮明になったといえます。これは、藤原宮だけでなく、都城研究に関して問題を投げかける、重要な成果です。想定外の位置からの想定外の発見。礎石据付穴のかすかな痕跡を頼りに柱位置を確定し建物を復元する作業は、難しいものでしたが、古代都城史を塗り替える重要な発見に立ち会うことができた調査でした。

10月6日には現地説明会を開催し、971名の方々にその成果をご覧いただきました。

今回の調査で新たに生じた課題を解明するため、藤原宮大極殿院の調査はこれからも続きます。今後の調査にどうぞご期待ください。

（都城発掘調査部 松永 悅枝）



平城宮東方官衙地区の調査(平城第615次)

平城宮内には、天皇の居住空間である内裏、政治や儀式の中心となる大極殿・朝堂院等とともに、行政の実務をおこなう官衙、いわゆる役所が設置されていました。これらの官衙は、平城宮内のいくつかのエリアにまとまって配置されており、そのうち第二次大極殿・東区朝堂院の東側、東院地区との間に配置された官衙群を東方官衙と呼んでいます。

2006年以降、東方官衙地区でトレンチ調査を実施し、今回の調査地にあたる場所には、築地塀で囲まれた大きな区画があること、その区画内に基壇建物が複数あることをあきらかにしていました。今回、この基壇建物のうち区画内北側の基壇建物(建物1)の規模や構造を詳しく知るため、7月初めより広く面的な調査を開始しました。

今回の調査では建物1の基壇全体を検出したほか、新たに建物1の西南・東南に南北棟建物(建物2・3)を検出しました。調査区西側では南北に伸びる築地塀とその下を通る暗渠も確認できました。

建物1の平面規模は東西約29m、南北約17mと判明し、基壇上面は削平を受けていたものの、比較的残りがよい基壇北半では礎石の据付または抜取の痕跡も確認できました。基壇の南辺・北辺ではそれぞれ3基ずつ、計6基の階段痕跡を確認しました。階段は基壇を構築した後に凝灰岩の細片を混ぜ込んだ土で付設しています。特筆できるのは、北面西階段の西半で階段の一段目の踏石や側面の石材を受ける地覆石等が抜き取られないまま、現位置を保って出土したことです。平城宮の建物跡で石材が抜き取られずにまとめて検出されるのは大変珍しいことです。石材の大きさや想定される階段幅から、建物1

の基壇の高さは本来90cm程度あったことが復元できました。さらに、この建物1は雨落溝をともないませんでしたが、基壇や階段の周囲一帯で丁寧に敷きこまれた礎敷の舗装を良好な状態で検出できたことも成果の一つです。

この建物1の基壇規模は大極殿や朝堂院に次ぐもので、平城宮の役所としては最大級の大きさです。築地塀で囲まれた区画の中軸上に配置されていたことからも、区画内で中心的な建物と推定できます。

また、建物1の西南・東南で新たにみつかった建物2・3は建物1に極めて近接した位置にありました。2006年度の調査(第415次)において建物1の脇殿とみられる南北棟建物(東西脇殿か)が本調査区外の南で検出されていますが、脇殿と別に正殿たる中心建物の東西に小規模な南北棟を配置する例は珍しく、特異な建物配置が想定されます。

さて、これほど大規模な正殿を中心に、特異な配置で構成されるこの建物群は一体どの役所のものだったのでしょうか。残念ながら、今回の調査ではその直接的な手掛かりになる墨書き器や木簡は出土していません。基壇規模からみても、平城宮の官司の中でトップクラスの役所に相当すると考えられます。平城宮の在り方をある程度踏襲すると推定されている平安宮の状況や調査地周辺での木簡の出土状況等をふまえると、現時点では太政官関連官司(弁官曹司)である可能性が高いと考えています。

3カ月の予定で梅雨の最中にスタートしたこの調査ですが、木枯らしが吹くなかやっと調査を終えようとしています。今後機会があれば、周辺の調査を実施し、さらに東方官衙の様相に迫っていかなければと考えております。 (都城発掘調査部 岩戸 晶子)



調査区全景(北西から)



北面西階段の踏石と地覆石(北西から)

魅力の詰まったキトラ古墳の四神たち -白虎-

キトラ古墳壁画は、2019年7月23日に国宝に指定されました。

青龍・朱雀・白虎・玄武の四神や十二支の図像には、それぞれの魅力が詰まっています。

墨線の一本一本や筆の運び方など、細部までじっくり観察すると新たな発見があります。

今回は、四神のうち、西壁に描かれた白虎の魅力に迫ります。

白虎の魅力 -耳-

白虎の魅力の一つ、それは耳にあります。

白虎の小さな耳は、よく見ると単に丸いだけでなく、複数の線が集まって毛が表現され、まるで小さな筆先のように描かれています。

キトラ古墳は7世紀末から8世紀初頭に造営されましたが、当時のユニークな表現を垣間見ることができます。

キトラ古墳壁画保存管理施設では、年に4回、四神の季節にあわせて、壁画の公開をおこなっています。

今年は9月21日から10月20日まで、白虎と天文図を公開し、9,930人が参加しました。多くの方が白虎の耳を楽しめたと思います。

(埋蔵文化財センター 吉田 万智
飛鳥資料館 萩山 琴美)





実物の約1.5倍

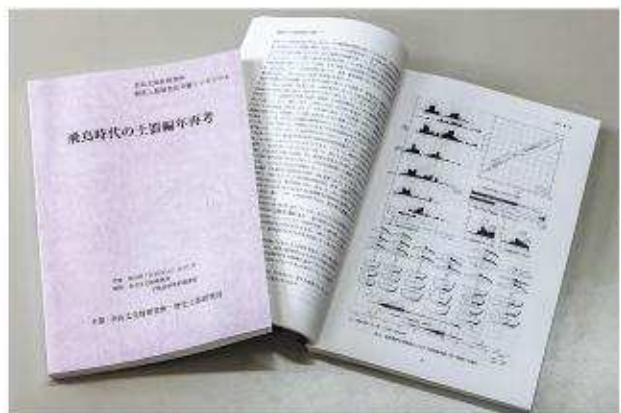
研究集会「飛鳥時代の土器編年再考」の開催

7月13・14日の2日間、歴史土器研究会との共催で研究集会を開催しました。テーマは、飛鳥時代の土器の年代観を改めて検討し直してみることです。飛鳥時代の土器が時代とともにどのように推移・変化したのかについては、1970年代に現在の通説である5時期区案が示されて以来、暦年代観の微調整はありましたが、今日まで基本的な認識の枠組みに大きな変更はくわえられていません。しかし、石神遺跡をはじめとする飛鳥地域の遺跡や、藤原宮・京から出土した土器群の研究が進む中で、これまでの暦年代観や土器様相の変遷観を単純に適用するだけでは、説明できない土器の存在があきらかになってきました。

こうした状況をふまえ、研究集会では宮都と各地の土器研究者7人による研究報告の後、約2時間にわたって討論をおこないました。討論では紙上報告者1名もくわわり、活発に意見がかわされました。実物の土器資料を見て議論をしようという趣旨のもと、あわせて開いた土器見学会もすこぶる好評で、最終的に284名もの参加者を得て、大変賑やかな研究集会となりました。

共催の歴史土器研究会は、奈文研の研究員が呼びかけ、古代宮都遺跡の発掘調査従事者が集まって、1984年に結成した研究会が母体で、現在は広く歴史時代の土器を研究しています。奈文研では、官衙や古代瓦の研究集会を継続的に開催していますが、土器の研究集会は久しぶりでした。研究成果を広く知つていただけたよう、今後も同様の企画を考えてゆく予定です。

(都城発掘調査部 尾野 善裕)



研究集会で刊行した発表要旨集

ICOM-CC オフサイトミーティングを開催して

9月1日から7日にかけて、第25回ICOM(国際博物館会議)大会が、「文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へー」をテーマに、国立京都国際会館をメイン会場として開催されました。ICOMは1946年に設立され、現在138の国と地域を代表する会員から構成される巨大な組織です。その中に、テーマを絞った委員会や地域連盟、ワーキンググループ等が多数存在しますが、ICOM-CC(保存国際委員会)も、こういった組織のひとつです。

会議期間中の9月5日、ICOM-CCのオフサイトミーティングを奈文研で開催しました。奈文研が選ばれたのは、東日本大震災後の被災文化財に対する活動の実績が知られていたためで、当日は震災時の文化財保護に専門家を持つ46名の専門家を、洋の東西を問わず文字通り世界各地から迎えての開催となりました。

半日間のオフサイトミーティングは、松村所長の挨拶に始まり、庄田による奈文研の組織や活動の紹介、中島アソシエイトフェローによる被災文書のレスキュー事業に関する説明の後、都城発掘調査部の木器・木簡、土器、瓦の諸整理室、埋蔵文化財センターの環境考古学、年輪年代学、遺跡・調査技術の各研究室のパックヤードツアーを、3つのグループに分かれておこないました。参加者からは、レスキュー対応に使われた真空凍結乾燥機だけでなく、発掘現場から運ばれてきた土壤の洗浄や、微細遺物の選別作業等、日々おこなわれている細かで地道な作業に接し、驚嘆と称賛の声が多く聞かれました。

(企画調整部 庄田 慎矢)



整理室見学の様子

東京講演会を開催

10月5日に東京の有楽町朝日ホールにおいて、「第11回東京講演会」を開催しました。この東京講演会は、奈良文化財研究所の日頃の活動や調査・研究成果を、広く東日本の方々に紹介することを目的として2010年から始めた企画です。

昨年は「藤原から平城へ－平城遷都の謎を解く」と題して、天武・持統天皇が国家の威信をかけて造営した律令国家建設のシンボルであった藤原京がわずか16年の短命に終わった理由やなぜ平城の地に遷都したのかといった謎に迫りました。

今年はそれに引き続き、「奈良の都、平城宮の謎を探る」と題して遷都後の平城宮の謎に迫ることとし、奈文研の6名の研究員が「平城の地はどうして選ばれたか?」、「平城宮のモデルは唐の都長安城か?」、「平城宮はどのように作られたのか?」、「平城宮の東院とはどういう施設か?」、「施釉瓦塼・陶器の出土は何を示すか?」、「平城宮で即位した天皇の大嘗宮は?」といった様々な観点から最新の調査研究成果を紹介しました。その後、6名の研究員にコーディネーターをくわえてのパネルディスカッションがおこなわれ、平城宮跡の今後の調査研究課題を論議的とし、「まだまだある平城宮の謎」の解明に向けた各研究員の意気込みが熱く語られました。

当日は464名の方の来場があり、10時から16時にわたる長丁場の講演会でしたが、メモをとりながら熱心に聴き入る方も多く見受けられ、大盛況のうちに終了しました。なお、東京講演会には、毎回多数の方にご来場をいただいております。あらためて御礼申し上げます。 (研究支援推進部 貴村 好隆)



会場の様子

赤米献上隊の来訪

10月10日、兵庫県養父市八鹿小学校の六年生児童が自分たちで育てた赤米を研究所に持ってきてきました。1963年の平城宮跡の発掘調査で但馬国養父郡小佐地域から赤米五斗を平城宮に納めたことを示す木簡が出土したことによるものです。兵庫県養父郡八鹿町小佐地区では1980年から赤米の栽培を始め、地元の小学校の児童が赤米を育て奈良の都に献上するというイベントを1990年から一時中断を含めて継続的におこなってきました。2012年の小学校統合後は養父市立八鹿小学校が引き継ぎ、地元で田植え・稲刈り・感謝祭・わら細工づくり等赤米づくりの体験活動をおこない、締めくくりに奈良の都に赤米を献上するというものです。

赤米献上隊は平城宮跡資料館にバスで到着し、そこから俵を担いで資料館へ持ち込み、贈呈式をおこないました。校長先生挨拶、奈文研代表挨拶、児童からの挨拶があり、児童からは赤米1升と当時の木簡を大きく拡大したものが届けられ、役人に扮する研究員が検品の後、領収証にあたる返抄木簡を手渡しました。養父郡出身の采女たちに扮した職員も参加しました。馬場史料研究室長の講話の中で、長さ約28cmの出土した実物の木簡を見た児童たちは「木簡は意外と小さかった」等の感想を語ってくれました。その後、児童たちは平城宮跡資料館を見学し、平城宮跡を後にしました。

出土遺物に関わる地域間交流は平城宮跡の活用にヒントを与えてくれたと実感しました。

10月17日付けの「なぶんけんブログ」に写真とスライドショーを掲載していますので、こちらもご覧ください。
(文化遺産部 内田 和伸)



赤米贈呈式の様子

飛鳥資料館 冬期企画展 「飛鳥の考古学2019」

今回の展覧会では、2018年度に飛鳥藤原地域でおこなわれた発掘調査の成果を中心に、最新の調査研究の成果もあわせて紹介します。

飛鳥京跡苑池では、北側の池が全面的に調査され、飛鳥時代の庭園の具体的な姿が判明しつつあります。小山田古墳では、古墳西南部で墳丘盛土と西裾部が確認されたことで、古墳の形状や規模を復元する新たな手がかりが得られました。飛鳥寺の北方でおこなった調査は、狭い範囲でしたが、飛鳥寺北部域の整備過程をより詳しく知ることができます。また、古代の幹線道路である山田道の調査では、道路に関わると推測される溝がみつかっています。藤原宮の大極殿院では、北面回廊周辺の調査により、北門の位置や回廊の構造とともに、造営過程の詳細もわかつきました。四条遺跡では、多くの建物が新たに確認され、四条大路の北と南における土地利用の一端があきらかとなりました。

この冬は、これらの発掘調査があきらかにした飛鳥の歴史研究の最前線をぜひお楽しみください。

(飛鳥資料館 若杉 智宏)



会 期：2020年1月24日（金）～3月15日（日） 月曜休館（祝日の場合は翌平日）※2月2日（日）は無料入館日

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎ 0744-54-3561

平城宮跡資料館 新春ミニ展示 「平城京の子」

2020年(令和2)は子年。「ネズミ算」という言葉もあるように、旺盛な繁殖力をもつネズミは、子孫繁栄・商売繁盛の象徴です。また、子年は、十二支の最初の年。新しいサイクルの始まりであり、成長に向かって種子が膨らみ始まるという意味を持っています。まさに、未来に向けて令和の時代が本格的に動き出す年としてふさわしいといえるでしょう。

さて、申(2016年)、戌(2018年)、亥(2019年)とおこなってきた新春ミニ展示。子年の今回は、奈良市法蓮町の那富山墓にある隼人石に線刻された謎の獸頭人身像の拓本画像を展示します。これがなぜ、ネズミなのか？は、平城宮跡資料館でご確認ください。また、「鼠」と表記されている木簡の写真も展示します。乞うご期待。

それでは、新年が皆様にとって、よい年であることをお祈りしております。

(企画調整部 加藤 真二)



会 期：2020年1月4日（土）～1月26日（日） 月曜休館（祝日の場合は翌平日）

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

ホームページ：<https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎ 0742-30-6753（連携推進課）

■ 記 錄

文化財担当者研修(専門研修)

- 堆積・地質学基礎課程 9月17日～9月20日 32名
- 遺跡GIS課程 9月24日～9月27日 8名
- 出土木器調査課程 9月30日～10月4日 4名
- 保存科学II(有機質遺物)課程 10月15日～10月24日 11名
- 文化財三次元計測課程 11月18日～11月22日 12名
- 文化財写真課程 11月25日～12月5日 11名
- 報告書編集基礎課程 12月5日～12月12日 24名
- 報告書デジタル作成課程 12月12日～12月19日 13名

現地説明会

- 平城第615次調査(平城宮東方官衙地区)
令和元年9月29日（日） 892名
- 飛鳥藤原第200次調査(藤原宮大極殿院)
令和元年10月6日（日） 971名
- 東大寺東塔院跡発掘調査
令和元年11月10日（日） 850名

飛鳥資料館 秋期特別展

10月11日（金）～12月1日（日） 6,506名

「飛鳥－自然と人と－」

平城宮跡資料館 秋期特別展

10月12日（土）～11月24日（日） 13,257名

「地下の正倉院展－年号と木簡－」

第11回東京講演会

10月5日（土）10:00～16:00

於：有楽町朝日ホール

464名

第125回公開講演会

11月9日（土）13:00～16:00

於：平城宮跡資料館講堂

150名

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <https://www.nabunken.go.jp>

Eメール koho_nabunken@nich.go.jp

発行年月 2019年12月